

# 京阪神聯合保育会雑誌(2)

## ——時代的な内容の変遷——

水野浩志

前回にひきつづいて京阪神聯合保育会雑誌の内容の変遷について、これを明治三十年代前半と後半、明治四十年代と大正期の四期に分けて各期における主なる理論的傾向や保育会の動きを同雑誌からたどってみることにしよう。

### ① 明治三十年代前半の動向

同雑誌が創刊された明治三十一年七月から第九号（明治三十六年一月）に至る三十年代前半の傾向は、幼稚園保育における恩物

使用法や、新しい唱歌・遊戯の紹介及び京阪神各地区における幼稚園および保育会の創立沿革事情の紹介記事が非常に多かった。恩物の使用法やその意義については神戸の頌栄幼稚園長、エー・エル・ハウや同園の主任保母和久山キソ等が中心となり、三市の保育会を指導していた。三市保育会結成の動機になったのもハウの講演をきくために京阪地区の幼稚園関係者が一堂に会したのがそもそのきっかけであった。わが国におけるフレイベル精神の普及者であり実践者であったハウとその忠実な弟子、和久山キソは、三市聯合保育会結成後、その中心的な指導勢力として活

躍したのであった。しかしながらハウを中心とする神戸保母会が明治三十五年、宗教上の理由で三市聯合保育会を脱会してからはその指導勢力から脱落してしまった。神戸保母会脱会の経過報告は同雑誌第八号（明治三十五年七月）に詳述してある。

ハウはアメリカのフレーベル主義保育の指導者スザン・ブローとも親交があり、アメリカに本部を置く万国幼稚園協会に会員として所属していたので、京阪神保育会雑誌に万国幼稚園連合大会の報告記事（第三号）や、スザン・ブローの講演要旨（第四号）、欧米各国の幼稚園発達事情（第四号）およびその種類（第六号）、あるいはアメリカにおける幼稚園論争（第七号）等を寄稿し、会員の啓蒙につとめてきたが、第八号以降にはほとんどみずから寄稿することはなかった。このことはわが国の幼稚園教育発展にとってまことに惜しいことであった。

創刊号および第三号（明治三十二年九月）に掲載されている東京女子高等師範学校教授兼同校附属幼稚園主事、中村五六の論説は、第二回および第四回三市聯合保育会での講演内容であるが、ここでは形式主義的な恩物使用法の遵守にのみ力を入れていた当時の幼稚園保育に批判を加え、生理学や心理学の研究成果に基づく児童発達の特質を把握した上での学問的な保育方法の確立の必要性を強調している。そして「恩物の児童発達に及ぼす意義とそ

の扱い方の技術を充分把握・習得した者でない限りはみだりに恩物を使用してはならない。」「もし使うならば保母各自の力量に応じ恩物中適宜なものを取捨選択し、子どもを楽しくかつ自己活動的に遊ばすよう心掛けることが必要である」こと等を強調している。これはわが国における恩物主義保育を批判した最初の論説として興味深い。また第七号（明治三十四年十二月）には、「我国における幼稚園は果してフレーベル流のものか」という彼の論説が掲載されているが、ここでもフレーベルの精神を忘れて形式のみあるいは技術のみにとらわれて実質をとらえていないわが国幼稚園保育のあり方に警鐘を鳴らしている。

第八号と第九号には東京女子高等師範学校助教東基吉の「幼稚園学説及現今の保育法」という論説が掲載されている。これは彼が『教育学術界』誌に発表した処女論文の再録であり、明治三十七年に刊行した『幼稚園保育法』の骨子を述べたものであった。彼は中村五六よりも明確な調子でフレーベルの恩物論を批判し、その中にふくまれている「牽強付会ともいうべき幽玄な哲理」や「表号的教育論」（象徴主義）はいささかも認めることはできないとし、恩物の理論や使用順序の形式を破棄し、もっと自由に子どもの自己活動を満足させるための道具として使用すべきことを提唱している。また遊戯や唱歌や童話なども従来の形式的

保育から脱して、子どもにふさわしい自由な、自然主義的保育の採用を強調している。

このような東基吉の革新的保育論が京阪神聯合保育会雑誌にはじめて紹介されて以来、同地区の保育界の動きは次第に変化してくるが、それは三十年代後半に入ってからのことであった。

## ② 明治三十年代後半の動向

同雑誌第九号から第十八号（明治四十年一月）までの論説や記事から同保育会の動向を伺えば次のようにいえよう。すなわち明治三十年代前半は、従来の幼稚園教育に相当の自信と誇りを以てフレーベルの恩物中心主義的保育を実践してきた人々が、三十年代後半に入ると東基吉等の批判論を通して、次第に恩物中心の保育に懐疑の眼を向けはじめたこと、さらには幼稚園に対する世人の非難・批判に対する幼稚園教育の意義や保育効果確認の必要性が痛感され、新しい幼児教育法に対する暗中摸索の時代であったこと。

フレーベルの恩物論や当時の幼稚園教育に対する批判は、東基吉の論説のみならず、京都市保育会で活躍していた市橋虎之助の著書『幼稚園の欠点』（明治三十五年）がフレーベルの恩物論に

徹底的な批判と、従来の幼稚園に対する過激なまでの攻撃を加え、当時の三市聯合保育会の人々に一大波紋を投げかけたことも事実である。金科玉条とされてきたフレーベルの恩物主義保育がこれで一挙に崩れ去ったわけではなく、従来の恩物論を信奉する人々と革新的保育を導入しようとする人々とが入り乱れて、現場の保育は相当混乱をきたしたものと思われる。

明治三十六年五月、大阪府教育会主催で開かれた全国教育大会保育部会の報告内容は、第十一号及び第十二号に詳細に掲載されているが、そこでは神戸保母会提出の研究協議題目について、エー・エル・ハウおよび和久山キノ等が活発な論戦を展開してフレーベルの恩物論などを擁護している。また岡山県保育会でも明治三十六年、夏期講習会にハウおよび和久山キノを招いて保育法の講義を実施し、「保育法講義録」として出版している。このようにハウや和久山等が三市聯合保育会からは脱落しても、全国的な保育大会や関西地区になお相当な指導勢力を以て活躍していたことを知ることができる。ハウの教えを受けた人々はハウ式保育（フレーベル主義）を信奉し、容易にフレーベルの恩物使用における順序や理論を破棄することはしなかった。このように根強いフレーベルの恩物中心主義保育と自然主義的自由主義的な進歩的保育とは相対立しつつ、徐々に後者の勢力が強くなっていったと

いうことができよう。

しかし明治三十年代後半は幼稚園に対する世間の風当たりが強く、幼稚園は全く不振状態にあった。三市聯合保育会では、幼稚園教育の意義とその必要性を世人に理解させるためには、その教育効果を立証することが必要であるとし、幼稚園の保育効果を調査するための検討委員会が組織された。それは全国教育者大会保育部会の席上、大阪市保育会に委託されたものであったが、一年間の検討結果が同雑誌第十二号（明治三十七年七月）に掲載されている。「幼稚園に於て保育を終りし幼児が小学校其他将来に於ける成績調査に關する方法」と題して調査すべき内容項目・方法等の原案が示されている。

このような保育効果に關する調査方法が発表されて以来、三市各保育会は積極的な調査に取組んだようであるが、その結果が発表されるのはいずれも四十年代以降のことである。また明治三十年代後半には日露戦争が勃発し、同誌第十二号に「宣戦ノ詔勅」が巻頭に掲載されたのはじめ「時局ニ關スル詔勅」（第十三号）、「聯合艦隊司令長官ニ賜ワリタル詔勅」（第十四号）等、第十六号（明治三十八年十二月）まで毎号詔勅が掲載されている。第十三号（明治三十七年十二月）には神戸市出征軍人遺族児童保管所をはじめ、大阪市九条幼児保育所など保育所開設の記事が多く見ら

れる。このように日露戦争が保育界にいろいろ影響を与えたと思われるが、当時の三市聯合保育会第十二回大会（明治三十八年）の協議題目「幼児に時局に關する觀念を与うるの可否」についての協議内容をみると、各市保育会とも敵がい心をそる等のことのないよう保育に気をくばり、幼児に時局認識を与えるなど全く必要なしとの結論を出している。保育の世界に軍国主義的色彩の入りこむことを拒否した当時の三市保育会の人々の見識を伺い知る意味で興味深い（第十四号）。

### ③ 明治四十年代の動向

同雑誌第十九号（明治四十年七月）には京都帝国大学教授谷本富の論説「幼稚園を如何にすべきや」が巻頭にかかげられている。これは第十四回三市聯合保育会（明治四十年六月）における講演内容であったが、ここには当時の幼稚園に対する非難の声が七か条にまとめられ、今後の幼稚園に望む事項十二か条がかかげられている。この中で谷本は健全な中流階級の家庭には幼稚園は不要で、上流階級や下層階級の家庭にこそ幼稚園は必要だと強調している。当時の教育界の第一人者であった谷本富のこのような中流家庭の幼稚園不要論は保育界に大きなショックを与えたもの

と思われる。

同雜誌第二十四号（明治四十二年十二月）には東京女子高等師範学校助教授和田実の「幼稚園出身児の成績に関する調査について」の論説が掲載されているが、和田はこれの中で長期にわたった幼稚園出身児の成績調査結果に基づいて、幼稚園が一般家庭の幼児にとって如何に必要であり、大切なものであるかを強調している。

このような幼稚園教育の必要性を立証するための保育効果に関する調査は、三市聯合保育会でも明治三十七年以降着々と進められてきたが、その結果は同雜誌第二十五号に掲載されている。そのほか第二十一号（明治四十一年七月）には長崎市の小学校長が幼稚園出身者と家庭から小学校に入学した児童との成績比較を発表しており、第二十四号には京都市および神戸市の各小学校長による調査結果、明石女子師範附属小学校における調査など、保育効果を立証する報告が数多く掲載されている。

とりわけ第二十七号（明治四十四年七月）の付録につけられた大阪市役所学務課の調査による「保育の有無による児童成績比較表」は、大阪市の小学校および高等小学校在籍児童二四、〇〇〇人を対象に各学年、全教科にわたりその成績を比較したもので、三年がかりの当時としては画期的な大調査の結果報告であった。

そして結論的に幼稚園の保育を受けた児童の方が、全く保育の経験をもたなかった児童より、はるかに小学校や高等小学校で成績が優れていることを強調している。

このように明治四十年代は幼稚園不要論や有害論等、幼稚園教育に対する世人の非難や批判に反ばつた当時の保育関係者達が、幼稚園教育の重要性や必要性を立証しようとして、保育効果の調査に一致協力してあたつた時代であり、またその結果、幼稚園教育に対する新しい自信をとりもどつた時代といふことができるであらう。

明治四十年代には和田実の革新的な保育理論の一端が、はじめて同誌第二十六号（明治四十四年一月）に紹介されているが、そのほかにはほとんど同誌に彼の論説は掲載されていない。第二十六号には「保育の事について」「現今の保育について」「阪神地方の保育界を見る」という彼の三論説が紹介されており、京阪地区の保育界の積極的・進歩的な姿に拍手を送っている。このような和田実の阪神地方の保育界視察報告は、三市聯合保育会を鼓舞したものであったが、さらに同聯合保育会を勇気づけ、実践の理論的裏付けを提供したものは、倉橋惣三の論説「幼児保育の新目標」（同誌第二十九号）であった。これは明治四十五年六月に開催された第十九回三市聯合保育会における講演内容であるが、彼

はこの中で、現代もっとも要求されることは、神経衰弱的な人間にならないよう、活動力にみちあふれた人間をつくることであり、そのためには幼児における神経系統を保護し、育成することがこれからの幼児保育の新目標とならねばならないと強調した。

従来の幼稚園における室内中心の保育は幼児の神経系統に有害であり、もっと自然を相手とした戸外保育が必要である。指先の練習より大筋肉を使用する運動をもっと活発にさせることが筋肉発達の原因からいっても必要である。既成の高価な恩物教材を扱うことよりも、もっと自然の与える恩物を扱うことの必要性などを論述している。

これまでも三市保育会では自然物の利用や園外保育など多くの進歩的な試みが実践、報告されてきたが、この倉橋惣三の講演は、彼等に理論的根拠を与えることとなり、三市各保育会は自信を以て恩物中心主義をすて、戸外保育や自然物利用の保育を積極的に実践しはじめたのである。

#### ④ 大正期の動向

明治末年における倉橋惣三の新保育の奨励は、大正期の自由主義・児童中心主義の教育思潮に裏付けられながら幼稚園教育界に

滲透していった。そしてまた子どもの実態を把握することの必要性も強調され、実験的科学的な保育研究の運動が展開されはじめるとともに、フレーベル主義保育にかわってモンテッソーリ主義保育が新時代の脚光を浴びて登場してきた。しかしまた一方では真のフレーベル精神の研究とその実践における反省も行なわれ、フレーベル保育の再認識の必要性も強調された。

このような大正期保育思想の変遷も京阪神聯合保育会雑誌は如実に描写している。

モンテッソーリ主義保育について同誌にとりあげられた最初の論説は大正二年二月の第三十号に掲載された神戸幼稚園保母佐藤ますの「モンテッソーリ氏教育的器具に就て」であった。神戸市保育会は神戸女学院の横川四十八を講師として「モンテッソーリ科学的教育学」の講演会を大正二年二月より週二回ずつ計八回の連続講演を唱催している（同誌第三十一号）。また第三十二号（大正三年二月）には大阪市西区保育会主催による講習会の京都帝国大学助教授野上俊夫の「モンテッソーリ氏教育法」が紹介されている。第三十三号には京都市保育会が大正三年七月に開催した、日本女子大学附属豊明小学校主事、河野清丸を講師とする「モンテッソーリ氏講演会」の内容記事が掲載されている。神戸幼稚園長望月クニはモンテッソーリの感覚訓練法をまねて「触覚筋覚関

節寛を根底とせる図画教授の実験的研究」を第三十二号に発表掲載している。また同号には大阪毎日新聞に掲載された「モンテッソリー女史新教育」の内容記事が紹介され、第三十五号には膳たけの「関西保育界とモンテッソリー女子教育思想」、第三十六号には河野清丸の「モンテッソリー教育法の功罪」などが掲載されている。

大正二年神戸幼稚園の望月クニは子どもの実態を知るために京都帝国大学の榑崎浅太郎を同園に招いて一年間、毎月二回の心理学研究会を開催しているが、これを基礎として彼女は同園の保姆達と協力しながら子どもの実態調査や実証的科学的な保育法研究を行ない、三市聯合保育会雑誌につきつぎにその成果を発表掲載していった(三十二号・三十三号・三十七号・四十号・四十二号・四十三号・四十四号の各誌)。望月クニを中心とする科学的保育研究のあり方はやがて京都・大阪にも普及し、三市保育会の運動として展開されていった。

一方フレーベルの保育理論については、その神秘主義や象徵主義哲学を抜きにした現代心理学の立場に立つてのフレーベル教育法のすばらしさが再認識され、フレーベル精神に立ち返れという主張も出はじめていた。

大正四年の第一回全国幼稚園関係者大会において望月クニはモ

ンテッソリー教育法を批判し、フレーベルの自発活動の理論をこえる何物もなく、単なる方法技術論で多少参考になる程度のものであるといった趣旨の講演を行っている。東京府女子師範学校附属小学校主事、日田権一もモンテッソリーの教具よりフレーベルの恩物の方が永続性があると強調している。(『日本幼児保育史』第三卷一六七―一七三頁参照)

これらのことから考えると京阪神地区では望月クニ等を中心にモンテッソリー教育法がいち早く現場保育に導入され、研究実践されたのであるが、結局はあまり永続させず、一時の流行現象に終ってしまったというのが実態だったと思われる。

そして倉橋惣三が提唱した大自然を教場とした戸外保育、自然物利用の保育が三市保育会では大いに歓迎され、実践された。同誌第四十五号(大正十一年)には大阪市で開設実践された露天幼稚園の記事がのっているが、さらに大阪毎日新聞社会事業部の橋詰良一は大阪に「家なき幼稚園」の運動を積極的に展開していったのである。

このほか大正期には幼稚園関係諸団体の運動も次第に活発化し、とりわけ三市連合保育会は当局に対し積極的に多くの陳情・建議を行ない、大正末年には幼稚園令制定に向け全国的な運動を展開し、やがて幼稚園令の制定に至るわけであるが、その原動力

となって活躍したのは望月クニであり、彼女は正期の京阪神聯合保育会の中心的指導者として活躍したといふことができるであらう。三市聯合保育会で行なつた陳情や建議、さらには研究協議題目の主要なもの等については『日本幼児保育史』（日本保育学会編）第三卷の「大正期の保育会の姿」の拙稿中に掲載してあるのでここでは省略する。

以上京阪神聯合保育会雑誌の創刊号から関西聯合保育会雑誌と改称（昭和三年）されるまでの約五十冊の内容変遷について、理論的・実践的な動向の移り変りを概観してみた。同誌にどのような理論や実践が掲載されているか、大まかな視野を得る参考となれば幸甚である。しかし前述したように三市聯合保育会雑誌はまことに貴重な保育史的文献であり、早い機会に全巻復刻され、完全な解説が試みられることを期待し、拙稿をこれで閉じることにする。

＝了＝

（東京都立立川短期大学）

\*

\*

## 第10回みどり会夏季研修会おしらせ

今夏のみどり会研修会は、みな様のご協力のお蔭で第10回を迎え、これを記念し、東京で開催いたします。眞の保育の道を進み、21世紀をになう幼児を育てるために次回への前進の基となるよう、みなさまと研修いたしたいと思います。今までご参会のみなさまは勿論、他の方もお誘いあわせて多数ご参加をおまち申し上げております。

### 主題 眞の保育の道を進もう

— 21世紀をになう幼児を育てるために —

期日 昭和55年8月20日、21日、22日の3日間

場所 東京都文京区大塚二一ー お茶の水女子大学講堂

会費 一名六千円（申込と同時に振替で払込むこと）

内容 ・講演——河野重男氏 勝部真長氏 津守真氏

・シンポジウム——服部公一氏（作曲家）、やなせた

かし氏（漫画家）、竹田扇之助氏（人形座主幹）

・レセプション（ご希望の方は会費八千円別）

（今までの講師全員ご出席の予定）

### ・話しあい（課外）

申込期間 6月15日の消印より受付けます。

申込方法 氏名、現住所、勤務園名、勤務園住所、夏季連

絡先TELを記入し、一名一枚にかき、会費六

千円は（東京99085）へ払込んで下さい。

尚、詳細は第1回〜第9回までご出席の幼稚園保育園にはプリントで次第郵送いたします。その他詳細御希望の方は50円切手同封の上お申下さい。